

2024年3月3日

説教題「いのちのパン」ヨハネ福音書 6章 34～40節

主任牧師 加藤 誠

**「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」(ヨハネによる福音書6章35節)**

今一緒に読んだのはヨハネ6章の冒頭の「五千人の供食」という出来事のあとに、その奇跡を体験した人びとと主イエスとの間に交わされた会話の一部です。ヨハネ福音書は「五千人の供食」の出来事に込められた深い意味を6章全体を用いて掘り下げていきます。人びとが願っている救いと、主イエスが示そうとされている救いととの「大きなすれ違い」。人々が自分たちのお腹を満腹させてくれるパンを求め、そのようなパンを与える「神」や「王」を求めたのに対して、主イエスは目には見えない霊的な食べもの、神とのつながりによって与えられる食べもの大切さを語られたために、最後にはケンカ別れになっていく。読んでいますと、目に見えるもの、手で触れるものにとられる人間の罪の深さが悲しくなってくる箇所でもあります。

例えば14節を見ますと、パンの奇跡に感動した人びとが自分を王にしようとしているのを感じ取った主イエスはひとり山に退かれます。それでも人びとがしつこく主イエスを追いかけてまわしたので、主イエスとの対話が始まっていくのです。「父が天からのまことのパンを与える。神のパンは天から降ってきて世に命を与えるものだ」と主イエスが語りますと、人々は「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」と求めます。主イエスが「わたしが命のパンである。天から降ってきた生きたパンである。わたしを食べるものは永遠の命を得る」と語ると、人々は反論します。「この男はヨセフの息子ではないか。我々はその父と母と知っている。その男がどうして天から降ってきたなどと言うのか」と。さらに主イエスが「わたしを与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉である」と十字架で死んでいかれるご自分を語りますと、人々は怒りだしてイエスを攻撃します。「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか！ひどい話だ！」と。そして多くの弟子たちも主イエスのもとを離れてしまったのでした。

ここに浮かび上がってくるのは、人々がどこまでも自分の目に見える出来事、現象だけを見て、イエスのことを判断し、決めつけているのに対して、主イエスは出来事に隠されている霊的な真理、見えない神さまとのつながり、見えない神さまのいのちのことを語っておられるということです。人々はパンの奇跡を見て「すごい！」と熱狂し、「あのパンをいつでも食べられるようにしてほしい」と願う。それに対して主イエスは「あのパンは時間が立てばまたお腹がすく。朽ちるパンではなく、いつまでもなくならず朽ちることのないパンを求めなさい」と語られるのです。

ここで主イエスが言われている「命のパン」「天からの生きたパン」とはどういうものでしょうか。ユダヤの人びとにとって「命のパン」は、出エジプトの荒れ野の旅を支えた「マナ」のことでした。荒れ野の旅には日々の命を支えるパンが不可欠です。そのパンを神は不思議な仕方です毎日天から届けてくださった。その「マナ」と同じように、荒れ野を旅する私たちの命となり力となる「命のパン」として、主イエスは来てくださった。この「命のパン」である主イエスを食べるとき、私たちは「神のいのち」に養われ、力づけられ、慰められ、支えられるのです。

同時に主イエスは「自分が天から降ってきたのは、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためであり、その御心とは、私に与えてくださった人を一人も失わないで、永遠の命を与え、終わりの日に復活させることだ」（38～40節）と言われます。「天からのパン」は地上での旅を支えるだけではなく、私たちが永遠の命の希望につなげて生かすパンなのです。そのために主イエスは「わたしは自らの命を人々に与え、人々に食べられるパン」であることを語られます。「十字架で自分の肉は引き裂かれ、血が流される。しかし、そのわたしを食べて、人は永遠の命を得る」と。

この「永遠の命」の「命」はギリシャ語の「ゾーエー」という言葉で、神の命にだけ使われる言葉です。そういう意味で「永遠の命」は「神の命」と言い換えることができます。私たちが今生きている肉の命は永遠ではありません。かならず終わりの日を迎える命です。それに対して神の命には終わりがありません。神の愛にも終わりがありません。ですから永遠の命というのは死後の世界のことだけではない。今、今日、このわたしに注がれている神の命、神の愛に生かされることをいうのです。限りある肉の命を生きる者が、永遠の神の命、神の愛に生かされる者とされる。その希望に私たちが生かすために主イエスは来られて、十字架への道を歩まれたのでした。

「五千人の供食」は四福音書すべてが語り伝えているお話です。それはこの出来事が初代教会の人びとにとってどれほど大きな喜びであり、励ましの出来事であったかを示しています。ただそれは主イエスが食べるパンを必要な時に与えてくれる救い主としてあがめるお話ではないのです。男だけでも五千人を超える大群衆を前に「こんなもの何の役に立つだろうか！」と思われた小さな食事を主イエスが喜んで手に取り、賛美の祈りを唱えて祝福してくださった時、人々は満腹し、食べ残しのパンくずを集めると12のカゴにいっぱいになった。ありえないことであり人間の目には不思議なこと。しかし初代教会の人びとはこの時の主イエスを思い起すたびに、当時、巨大なローマ帝国の前に「小さな小さな群れ」に過ぎない自分たちを、喜び、祈り、祝福して下さる主イエスの伴いをリアルに覚え、慰められ、力づけられたのでした。この世界の中で小さく貧しく、限りあるもの。けれども、その一人ひとりを喜び、祈り、祝福して下さる主イエスを日々食べて、神のいのちにつなげられていきたいのです。